

## 翻 訳

# 「ジョンソン英語辞書構想案（1747）」試訳

（その1）

早 川 勇 訳

## ジョンソン英語辞書構想案解題

### 1. 言語アカデミー思想の流れ

16世紀末、西欧の近代諸言語はこれまでのラテン語に代わって文学および学問の言語として優れていることを証明しなければならなかった。そこで生まれた思想が言語純化の考えであり、生まれた組織がアカデミーである。あわせて言語アカデミー思想と呼ぶ。

イタリアでは15世紀以降国家統一の遅れにより国の言語はいくつかの方言に分かれていたため、言語問題が政治問題となっていた。対立する意見のなかから、イタリア中部トスカナ地方の方言を推す派が突出し、その方言がイタリア語へと発展した。トスカナの州都フィレンツェはダンテの郷里であった。1582年にアカデミア・デラ・クルスカが設立された。イタリア語の研究とその保持を目的としたが、実態は知的社交クラブであった。その後、イタリア語の統一と純化を目指す団体へと発展した。30年をかけ1612年に、アカデミアは辞書を編纂出版した。*Vocabolario degli Accademici della Crusca* である。ダンテ、ペトラルカ、ボッカチオらの文学を基礎とし、彼らの作品から用例を採った。その後、第2版（1623）・第3版3巻（1691）・第4版6巻（1729-1738）と版を重ねた。

フランスでも1630年頃、私的集まりのなかで作品や作家について議論が交わされた。これを基礎として、枢機卿リシュリュー（Cardinal Richelieu）のアカデミー・フランセーズが1635年に正式に設立された。アカデミーのもと、フランス語に標準を与えるために規則を設け純化すべきだと考えられた。同時に、フランス語の覇権を確保したいと目論んだ。会員数は40名と決められていた。この40人の学者が何と50年もかけ、1694年にフランス語辞書が刊行された。*Le Dictionnaire de l'Académie française* である。さらに、

第2版 (1718)・第3版 (1740)・第4版 (1762)・第5版 (1798) と刊行された。

一方、イギリスにおいてもアカデミーに発展する可能性のある団体が王立協会に設立された。1664年であるから、フランスに少し遅れてのことである。これは英語を改善するための団体で、作家のドライデン (John Dryden) や歴史家のスプラット (Thomas Sprat) など22人の委員で構成された。ここでは、文法、綴字改革、辞書、文体における純粋さなどが論じられた。しかしながら、この団体は政治的色彩が強く、言葉の面においては結局何も貢献するところはなかった。

1697年、デフォー (Daniel Defoe) は英国にもアカデミーを設立することを要求した。すでに辞書を完成していたフランスに遅れをとらぬためである。彼は英語純化を必要と考え、公的団体がそれにあたるべきだと訴えた。24名からなる団体が結成されたが、言語の専門家はだれもおらず議論は暗礁にのり上げた。さらに、1712年にはスウィフト (Jonathan Swift) がオックスフォード伯爵ロバート閣下に献上するというので A Proposal for Correcting, Improving and Ascertaining the English Tongue を著した。大陸の先進諸国と張り合い、言語の発展と衰退の理論を提示することによりその衰退を止めることを訴えた。イギリスにおいても近代語確立の動きは芽ばえたが、正式な形でのアカデミーは設立されなかった。このような言語アカデミー思想の流れのなかでジョンソンは生まれた。

## 2. ジョンソンの辞書編纂

サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson 1709年9月18日-1784年12月13日) は、イギリスのリッチフィールドに古本屋の子として生まれた。1728年にオックスフォード大学に入学したが、わずか14ヵ月で退学した。貧困のためだといわれている。大学中退後、文筆生活に入ったが、ロンドンでは経済的な生活苦にみまわれた。雑誌の記者で食いつなぎ、詩や劇を書いたり、随筆雑誌を興した。

1747年、ロンドンの書籍商組合はジョンソンに英語辞書編纂の仕事を依頼した。当時は大きな出版事業を進めるに際してまず「企画書」を書きこれを公表し、予約者を募る方法がとられていた。さらに、その著作を貴族などに献呈する形をとり、その見返りに庇護を受けるのが一般的であった。ジョンソン辞書の場合も同様であった。ここに翻訳する「英語辞書構想案」は1747年に書かれた。The Plan of a Dictionary of the English Language; Addressed to the Right Honourable Philip Dormer, Earl of Chesterfield; One of His Majesty's Principal Secretaries of State. 構想案のタイトルからわかるように、当時の政界実力者であったチェスターフィールド伯爵に捧げる形で書かれ公表された。なお、この案は前年に書かれた「新英語辞書編纂概要」(A Short Scheme for compiling a new Dictionary of the English Language) を全面的に書きかえたものである。

## 「ジョンソン英語辞書構想案（1747）」試訳

ジョンソンは数人の助手とともにこの事業に当たった。ベイリー (Nathan Bailey) の *Dictionarium Britannicum* (第2版 1736) を中心に多くの辞書や著作を参照し、8年を費やして辞書は1755年に完成した。フォリオ版2巻の『英語辞典』(*A Dictionary of the English Language*) である。これまでの百科事典的辞書編纂を否定し全く独自の新たな立場から辞書を編纂した。その最大の特徴は、過去の著名な作家の作品を読みそこから用例を集め、これを辞書の引用例として組み込んだ点である。引用した作家や詩人の数は数百人にのぼると言われる。これは、イタリアのアカデミー辞書を範としたにちがいない。こうして刊行された初版は好評ですぐに売り切れ、同じ年に再版された。この後1世紀のあいだ幾度も版を重ねただけでなく、トッド (H. J. Todd) による改訂版 (1818)、レーサム (R. G. Latham) による改訂版 (1866-70) も出版された。このため、近代辞典の編纂家が常に引用する原典となったのみならず、英語そのものにも決定的な影響を与えた。

辞典完成後の1759年に、ジョンソンは一週間で *Rasselas, Prince of Abyssinia* を書きあげた。この小説でジョンソンの名声は高まった。1779年から1781年にかけて『英国詩人伝』を出版した。彼は猛烈に読書し旺盛に書き多くを論じ、文壇で重要な地位を占めた。彼は若いころ、それ以前の慣例により貴族からの庇護を訴えたが、それは叶わなかった。しかし、結果としてジョンソンは文学を貴族の庇護から開放し、文学ジャーナリズムの確立に貢献した。この意味で、後世の英文学に与えた影響は絶大である。「ジョンソン博士」と呼ばれる。

翻訳に際しては構想案の翻刻版を利用した。Johnson, Samuel (1747): *The Plan of a Dictionary of the English Language*. London: Printed for J. and P. Knapton, et al. (Longman社リプリント版) である。読者の便を考え、段落の最初にその番号を付し、訳者の注は [ ] 内に示した。また、翻訳に際して次の書を参照した。

永嶋大典 (1983) 『ジョンソンの『英語辞典』その歴史的意義』大修館書店。

中原章雄 (1999) 『「辞書のジョンソン」の成立』英宝社。

諏訪部仁他編注 (1986) *Lessons in Language* 金星堂。

なお、ミルトンの訳は平井正穂訳『失楽園』(岩波文庫) によったが、英文と日本文が食い違うところがある。原本として利用した版がジョンソンと異なるためである。

## ジョンソン英語辞書構想案

国王陛下の重臣の一人であるチェスターフィールド伯爵フィリップ・ドーマー卿へ  
閣下

- [1] 私が最初に英語辞書の執筆をお引き受けしましたとき、私はこの辞書の著作権の所有者となる以上の庇護を期待していませんでした。また、労働の代価のほかはいかなる利益も望んでいませんでした。私が従事した仕事は目の悪い人に対する苦役だと一般的に考えられていることを承知しておりました。また、教養はないが勤勉な人間に適した骨の折れる仕事だと思われることも知っていました。学問的閃きも天才的営みも要求されない仕事です。忍の一字でひたすら重荷に耐え、エービーシーと続く道を鈍重な足取りで不屈の意志をもって歩むそれ以上の資質などなくとも、うまく成し遂げられるかもしれません。
- [2] このような考えは長期間にわたり人々のあいだに浸透し広く流布しています。私は虚栄心からも好奇心からも、この考えが真実から自然に生まれたのか、偶然に偏見から始まったのかを知りたいという気にはなりません。また、学問的な称賛に値する人々のなかで辞書編纂家は不幸にも最も低い位置にあるようです。こう決められたのが理性という権威によるのか無知という暴政によるのかも知りたいと思いませんでした。私に割り振られた分野は、すべての学問分野のなかで最も楽しくないものだと広く一般に認められているようでした。その野では花も咲かず実もならないと信じられているようです。また、長いあいだ骨折って耕したあとでも、そこでは実を結ばない月桂樹 [名誉の印しである] さえみられなかったように思われました。
- [3] しかしながら、閣下、私は心躍る期待を胸にこの領域に足を踏み入れました。この領域の評価は低かったので、ここは安全でもあるだろうと期待しました。私はこの領域で仕事に従事することを見込んで、人前に出て参りました。その仕事に華々しさはないが人に役立つものでしょう。それによって他人が私の人生を妬むことはないでしょうし、それによって私の人生は汚れないものになるでしょう。また、どんな怒りも生まないでしょうし、いかなる論争も巻き起こさないでしょう。私がこれから歩む道には、人にへつらつて自らの心の平穏を乱したり、他人を酷評して人の心の平静を乱すよこしまな心を起こさせるようなものはないでしょう。
- [4] 実際、貴族方や政治家が母国語の改良を進める企てを名誉あることのひとつだと考えられ、かつ辞書がそのような偉大な方々の庇護のもとに書かれた時代に関し私はいろいろ読んできました。このように種々の企画を庇護される方々が次のごとく信じておられることに対して、私は皆様方に心からの敬意を払いました。私たちの言語の永遠性をこのように案ずる方々には、自分たちの行動が後世の人々によって称賛され、彼らが奨励した純粹

な表現が彼らを称賛する際に後世の者たちが用いることを期待するだけのもっともな道理がありました。しかし、私はこのようにすばらしい善行を、期待よりもむしろ驚きを引き起こすために記される嘆賞すべき出来事だと考えました。そして、私は結びました契約条件に満足しておりましたので、重要な地位におられる貴卿が私の企画でその賛同を得るに充分だと思われておられることを知りました折りには、ほかのいかなる激励によっても私が得意に思うなど想像だにできませんでした。

[5] このような予期せぬ栄誉が人生の幸せな出来事のなかでどれくらいに位置づけられるか、私にはまだ判断がつきかねます。最初の影響として、それにより一般の人々の注目が私にあまりにも多く浴びせられるのではないかと心配しています。かつてフランスの叙事詩人に起きたように、その試みの名声が上がることによって作品が受け入れられなくなるのではないかと懸念しております。貴卿の威光のもとに遂行されるこの企画から世の中の人々が何を期待しているか想像しています。そして、わかりましたことは、期待の翼はいったん広げられると、実際には飛ぶことが決してできないような高みにまで容易に達してしまうということです。また、期待が絶頂に達したときには、期待はそれを追い求めてきた人間を嘲り笑います。そして、その人たちは、それを追い求めるうちに亡くなっているのです。

[6] それゆえ、期待を高めるのではなく抑えるために、この場で貴卿を前にして私の取り組みの構想を示します。その結果、私が意図する以上には要求しないでいただきたいし、進み過ぎて新たな方法を手掛けることができなくなる前にこの取り組みの欠点や不要な点について聴取したいのです。私が競争心からこのような情報を期待するのは正当なことでしょう。純粹さとか明敏さという賛辞を望む人々は、この企画を推し進めるにあたって、この競争心をもって他と張り合うにちがいありません。貴卿は、他と張り合っているこの企画が条約や戦争と同じような関心を払う価値などないとは考えておられませんでした。

[7] 私は自分の考えを初めて組織立てようとしたとき、この仕事の全体にかかわる困難に気づきました。どんな選択基準によって本辞書に収録する語を決めるべきかは容易ではありませんでした。本辞書の主たる目的は、英語の純粹さを保持しその語句の意味を確定することです。このために必要なことは、英語を私たち自身のものである範囲内においてのみ考察することだと思われまます。すなわち、日常生活を営む上での一般的伝達において用いられる語句、または洗練された著述家と広く呼ばれている人々の著作にみられる語句を選択し、個々の職業に用いられる用語は収録しません。それらの用語を除外する理由は、それがかかわっている技術工芸とともにほかの国に由来するのがふつうで、従って世界のこの地域におけるすべての言語において同じであることが多いからです。これはおそらく規則的なものを中心に扱う辞典の厳格かつ純粹な考え方でしょう。ほかの学芸と同じよう



に辞書編纂においても、専門知識はそのままの形では生活上の目的にとって詳しすぎるのです。作品の価値は、それが有益かどうかによって決定されなければなりません。辞書が批評家を喜ばせるというだけでは不十分です。同時に、学習者に教えるものがなければなりません。器械がその仕組みの精密さゆえに学者を喜ばせたとしても、その器械を利用するのにとても多くの知識が必要で普通に作業する者にとってそれが不利益となるのであるならば、その器械はほとんど目的を果たさないのと同じです [原本の to as be を as to be と理解した]。

[8] 私が著作につける書名によって長いあいだ伝えられてきたことは、辞書とはとても幅広く雑多な内容のものだという考えでした。辞書を手取る人々は、その辞書にほとんどすべての困難を解決する鍵を期待するのに慣れていました。このため、外国語の語彙を辞書から削除すると、批評家や批判好きな人々を除いて誰もその辞書をほとんど評価しないでしょう。そのような辞書は、書くことを中心とする人々にいかなる光明をもたらすとしても、読むことしかしない人々を真っ暗闇に陥れるでしょう。学問のない人々は語の構造や語形成よりも語の意味を求めて辞書を引くことのほうがはるかに多いからです。そして、説明を最も必要とする語は、一般的に技術工芸に関する専門語なのです。それゆえ、これまでの辞書編纂家たちは、経験に照らして、自分が編纂した辞書の至るところにこのような専門語を溢れるほど多く撒き散らしてきました。

[9] 実際、フランス・アカデミー会員は、最初の試みにおいて専門的な用語を排除しましたが、のちにそれまでの厳格な決定を緩めなければならないことを悟りました。彼らはそれらの語を一挙に母国語扱いすることを強く拒否しましたが、徐々に母国語のなかに定着していくことにはほとんど反対せず認めてきました。それゆえに、アカデミー会員が今日撤回した過ちを再びこの辞書で犯し、語彙を几帳面なほど厳密に分離することによって本書の主要な使用目的が損なわれるならば、それは決して思慮分別があることの証しとはならないでしょう。

[10] しかしながら、これらの語彙についてはすべてのものが私たちの言語の一部として同等に認められているとはかぎりません。というのは、同化し母国語のなかに組み込まれている語彙もあれば、依然として外国語のままで中核的というよりは補助的存在にすぎないような語彙もあるからです。この種の同化は、比喩的意味で日常会話に入ったことにより起こることがあります。私たちが、発展の頂点 (zenith) とか人生の絶頂期 (meridian) とか衆目的 (cynosure) [ミルトンの *L'Allegro* の 80 行において] と言っている通りです。それは、自分たちのなかにある種の財産を獲得するようなものです。同化の 2 つ目は、長期間にわたる混淆や頻繁な使用の結果として起こる場合です。それによって、私たちの耳はその語の音に慣れ、いつのまにか元の音を忘れてしまいます。equator, satellites がその

例です。3つ目の場合は、外国語の語尾が英語の語尾に変わったり、それが持ち込まれる言葉の法則にうまく合致するように変化する例です。category, cachexy, peripneumony などにおける変化 [ギリシャ語の語尾 ia が y に変わる] がその例です。

[11] 外国語の状態をずっと続け完全な同化に近づくことのないような語彙のなかにも、収録する必要があると思われるものもあります。なぜならば、本辞書を購入する人々はこのような語を辞書のなかにもつけることを期待しているからです。慣習法にみられる *capias* (拘引状) *habeas corpus* (身柄提出令状) *praemunire* (教皇尊信罪) *nisi prius* (巡回陪審裁判) のような多くの法律語がそれに該当します。また、*hypostasis* (神の位格) のように物議をかもしやすい神に関する語彙もそうです。さらに、病名のように医術に関する語も同じです。一般的に言うと、明らかに特定の専門に関して書かれたのではない本にみられるすべての語と、常に学問をしているわけではない人々にとって必要と思われる語は必ず収録しなければなりません。例えば、医術に熟達しているのではない読者がミルトンの作品のなかで偶然次のような句にでくわすと、その人は *atrophy* や *pestilence* という語と同じくらいの期待をもって *marasmus* という単語を辞書で調べましょう。

.....pining atrophy

*Marasmus*, and wide-wasting pestilence,

(次第に痩せ衰えてゆく萎縮病, 消耗病, 蔓延して人口を潰滅させる疫病, 平井正穂訳『失樂園』第11巻, 486-487)

ところが、辞書にこの語を見いだせなかったら、不平を言うのはもっともなことでしょう。

[12] 専門の批評家のためだけでなく、一般の人々に利用されることを目的とした辞書を完成させるためには、それぞれの職業や専門に特有な単語をある程度収録することが必要のように思われます。例えば、戦争や航海に関する語も、歴史や旅行記の読者にとって必要とされるかぎりは挿入すべきでしょう。また、法律や商業や手工業の専門語も、日常生活の各種出来事において有用と思われるかぎり取り入れるべきでしょう。

[13] しかしながら、いろいろな種類の単語には何らかの区別をすべきです。従って、英語のなかに組み込まれたものは普通の字体で印刷し、まだ外国語と見なされるものは斜字体で印刷するのが適切でしょう。

[14] ほかに、動植物の種しゅの名称と関連して問題が起こるかもしれません。horse, dog, cat, willow, alder, daisy [原本では dasy となっている], rose のような千にも近い語彙を定義するのは大した意味がないように思われます。というのは、その単語それ自体よりもその単語について明瞭な説明を与えることは困難に思われるからです。しかし、動物の名前を辞書に挿入する場合、偶然に余りなじみのない動物の名前だけでなく、よく知られている動物についても掲載しなければならないように思います。読者は *crocodile* (ワニ)

camæleon (カメレオン) ichneumon (エジプトマングース) hyæna (ハイエナ) などの語の引喩 [例えば crocodile には偽善者という意味がある] で困難を感じていますが、もしこれらの語をすべて排除してしまったら、いかにしてこの困難から解放されるのでしょうか。また、植物についても何も述べないならば、自然の最も素晴らしい部分が辞書から排除され、多くの美しい植物名が説明されぬこととなります。余り知られていない語のみについて述べなければならぬというのなら、だれが利用者の知的レベルを判定しその境界を決定するのですか。辞書にこの種の解説がないので起こる過ちを考えると、その重要性が生まれてきます。もしシェイクスピアがこの種の辞書を所有していたら、彼は woodbine (昼顔) が honeysuckle (すいかずら) に優しくからみつく [『真夏の夜の夢』4幕1場の1節] などとはしなかったでしょう。また、ミルトンだって辞書の助けがあれば、『失樂園』のなかで ellops [ギリシャ人が「かじきまぐろ」を海蛇と見誤ってつけた名称] や scorpion [さそり、ともに『失樂園』第10巻524で悪魔たちのなかに含められた] を不適切に用いることはなかったであろう。

[15] その上、これらの語はほかの語と同様にアクセントがどこか決めたり、発音を確認したり、語源や語形変化をたどる必要がありますので、当然のことながらこれらの語を辞書から除外することなどできません。その一部はほとんど遍く理解されているのでその説明がつまらないと人々に批判されるかもしれませんが、今後ほとんど見られないだろうということでは不必要だと言われるような語もあります。しかし、それらの語を収録しないのは適切でないように思われます。と申しますのは、多くの辞書利用者は、あると期待していたものがなくて落胆するのではなく、むしろ彼らが期待する以上のものを辞書に見たいと望むからです。

[16] すべての語を選択し配列したら、まず第一に考えなければならないことは綴字法です。綴字は長い間あいまいで確定していませんでしたが、その不安定な時期を過ぎ多くの場合単なる偶然によってやっと落ち着きました。また、貴卿のご指摘によれば、一流の批評家のあいだにすら依然として大きな揺れがあるということです。慣用と理性とのあいだで、また判断力と正確さが同じくらい優れた著述家の等しく重要な引用文の狭間で、私たちがどちらかを決定する規則を述べることは容易ではありません。

[17] 綴字法に関する大論争が、語源主義と発音主義とのあいだで長いあいだ続いてきました。一方で、話すように書くべきだという要求が起りました。しかし、発音と綴字との一致はいかなる言語においても達成されたことはなく、人々に説得し正確に同じように話しをさせるのは、書く場合よりも容易なことではないことがわかってきました。このため、むしろ書くように話したらと要求するのは同じくらいの妥当性をもっているのではないのでしょうか。この議論が最高潮に達したフランスにおいては、どちらの陣営もとても熱



心だったのですが、自分たちの規準に敢えて最後まで固執することはありませんでした。語源主義者もしばしば一般の人々に合わせて綴ることを強いられました。また、発音の權威に従うべきだと主張する者も、それでは余りにも身勝手に気まぐれに広く受け入れられている表記法からはずれますので、時にはいやでも敵陣の規則に従わざるをえませんでした。それは手段によって目的を見失わぬためであり、また、一般大衆に従うことにより自分たちが孤立しないためです。

[18] 私の考えでは、綴りの問題が決着しかねる時には、慣用を優先すべきです。具体的には中核となる部分の文字数をできるかぎり維持します。それは私たちの言語の一般的な慣習に最もうまく沿っているように思われます。しかし、私が従っていただきたいと提案する一番の原則は、言語の変革によって生ずる不便を埋め合わせする十分な理由がないかぎり、言語に新機軸を持ち込むようなことは決してしないということです。そのような理由がしばしば見いだされるとは予想できません。あらゆる変化はそれ自体悪です。それゆえに、明確な利益がないかぎり、変革を起こすなどということを思い切つてやるべきではありません。また、あらゆる場合において、一定しない状態は弱さの象徴ですから、それによって私たちの言語の評判が上がることは決してないでしょう。実際に、混乱による不便を軽蔑しながら、慣習から逸脱することに喜びを見だし変革をそれ自体として望ましいと考えているように思われる人々もいます。それらの著述家たちが試みた英語の正字法の改革に正当な名誉が与えられることなく見過ごされるべきではありませんが、彼らが統一性をそれ自身として報われるべきものだと思なしているとか、あるいは惜しめない称賛の魅力に畏怖の念を抱いていると思われる場合はその限りではありません。

[19] 現行の綴字というのがはっきり認められればの話ですが、この辞書においては、現在一般的に行われている綴字に従います。しかし、注意してみると、現行の綴字はそれ自体として不正確で、選択されたというよりも容認されたものにすぎないことがわかる機会はしばしばあるでしょう。特に、文字が一つまたはいくつか変わることによって単語の意味があいまいになる場合に、このことは言えます。例えば、farrier（馬医者、蹄鉄工）は以前 ferrier と綴られていたことからわかるように、ferrum（鉄）や fer から来ていますが、綴りが e から a に変り意味がわからなくなっています。また、gibberish（専門的な難解語）についても同じことが言えます。この語はかつて gebrish と綴られ、拝火教徒（Geber）やその後の錬金術師たちの用語で、その仲間以外誰にも理解されませんでした。その上、ある語の綴りを各時代ごとにたどり本来の語からどのような段階を経て現在に至ったかを示すことも、時には適切なことでしょう。

[20] 綴りと密接に関連しているのは発音です。発音が安定していることは言語が永らえるのにとっても重要です。なぜならば、言葉における最初の変化は生きた話し言葉の崩れや

訛りから始まるのが自然だからです。かつての時代の発音は一定の規則を欠いていましたので、私たちは古代の詩人による韻律上の技巧にまったく気づきませんでした。詩人の心情に迫りたいと思う人は、彼らの韻律がなくなったことを残念に思いますが、まさに今こそ近代人の韻律は古代人のものよりも永く生き続けるだろうと予見できます。

[21] 新しい発音は、ほとんどの場合、新しい言葉を生み出すことになるでしょう。それゆえに、この企ての一つの大きな目的は英語を固定化することですから、適切な典拠によってすべての多音節語のアクセントの位置を決めるのに注意を払うべきでしょう。なぜなら、単語のアクセントは簡単に法則化できない気まぐれな言語現象の一つだからです。例えば、*dolorous* と *sonorous* という二つの単語におけるアクセントの違いに対して、これまで理由はまったく示されませんでした。ほとんど同じ綴りにもかかわらず、ミルトンは次の文において片方の単語に対して次の音を与えています。

He pass'd o'er many a region *dólorous*.

(彼らはおも暗く陰惨な谷間をいくつも渡り、平井正穂訳『失樂園』第2巻、618-619)

また、もう一つの単語を下の文で用いています。

*Sonórous* metal blowing martial sounds.

(喇叭が吹奏され、士気はいつそう昂揚した。平井正穂訳『失樂園』第1巻、540)

[22] さらに、韻律上の破格について述べるのも適切かもしれません。*generous* を *gen'rous* と、*reverend* を *rev'rend* とするような短縮形や、*region* や *question* のように語尾の2つの母音が1つに融合する例です。

[23] しかし、もっと必要なことは対応する音をもつほかの語と一緒に並べて、単音節の発音を決定することです。それは、最も普通に用いられる語の一部にすでに起こっている危険な変化に対して、ある語がほかの語を守るためです。*wound* と *wind* は今日しばしば発音されているように *sound* と *mind* とは韻を踏みません。*flow* と *brow* のように多くの語が同じように綴られるにもかかわらず異なった発音になることは注目しなければなりません。例えば、*flow*, *woe*, *brow*, *now* が列記されるでしょう。これら韻を踏む語は対句や二行の短詩の形式で一般的に例示されるかもしれません。例えば、「引き裂く」という意味の *tear* と「涙」の意味の *tear* は同じ文字で構成されていますが、*tear - dare* と *tear - peer* のように区別されます。

[24] 二つの発音をもつ語もあります。それは同じくらい権威ある典拠によって擁護されていますので、二つとも容認してもよいでしょう。例えば、*great* は次の例のように異なって用いられます。

For Swift and him despis'd the farce of state,

The sober follies of the wise and *great*. Alexander POPE (1688-1744)

「ジョンソン英語辞書構想案（1747）」試訳

(スウィフトと彼のために、(あなたは) 高位の人々の茶番と賢い人々や気高い人々の真面目くさった愚行を軽蔑した。)

As if misfortune made the throne her seat,

And none could be unhappy but the *great*. Nicholas ROWE (1674–1718)

(まるで不運は王座を自分が座る席とし、高貴な者以外には誰も決して不幸にはならないとでもいうように)

このように個々の細目に注意を払うことはくだらないと非難される方もみえるかもしれませんが、一層洗練された言語においてはこれらの点が注目に値しないと考えられたことはありません。

[25] フランス語では文字が音を正確に表わしていることはよく知られています。イタリア人のなかでクレシェンベニ (Giovanni Mario Crescembeni 文学者 1663–1728) の場合、ある特定の単語は異なる韻に合わせ異なった綴りで書くことは許されると一般大衆に対して告知することが不必要だとは決して思いませんでした。ただし、そうした語の数はきちんと一定していますので、近代の詩人といえど誰もそれを増やすことは許されません。

[26] 綴りと発音がうまく調整されたら、次に考察しなければならないのは語形成や派生です。単語をいろいろな種類に従って分けなければなりません。day や light のような単一語もあれば、daylight のように複合語もあります。to act のような語根 (語幹) もあれば、action, actionable, active, activity のような派生語もあります。これらの点は英語の習得をずっと容易にすることでしょう。ところが、英語がおかれている現状は厳しく、語彙がその依存や派生の関係を見捨てて乱雑に辞書にほうり込まれているのです。

[27] 辞書におけるこの領域の仕事がうまく成し遂げられたら、英語の基本である語根がいかにしてほかの言語から導き出されてきたかを探求する必要があるでしょう。この点については私が国における語源学者の助けをお借りして、とてもうまく処理できることが多いでしょう。この面の研究は、多くの奇妙で不確かな論説や、時にはひょっとしたら憶説を生むこともあるでしょう。それらの点はこの種の研究になじみがない読者には、ありえないとか気まぐれだとしか思われません。言語のようにならかなり人々の意のままになっているものなら、しばしば気まぐれによって事が進められると想像するのは当然かもしれません。また、これらの不確かな論説や憶説がすべて例外なく機知の気ままな戯れとか学識の無益な開陳だと考えられるべきではありません。我らが母語は祖語ではありません。すなわち、その起源を自らに有するのではなく、あらゆる世代の語彙を取り込んできたことはよく知られています。また、言語としての必要を満たしたり、英語の内容をより豊かにするために、とても遠くにある地域から多くの語を受け入れ語彙を追加してきました。その結果、私たちの言葉の祖先を訪ね、熱帯地域から寒冷地帯までさまよい歩き、パレスチナ

の谷ではあるものを発見したり、ノルウェーの岩間ではまた違うものを見つけるかもしれません。

[28] 特定の語の派生のほかに、さらに句表現の起源の問題もあります。いろいろな表現がほかの言語から採られています。run a risk はフランス語の *courir (=run) un risque* から来ています。このように明白なものもあれば、句を構成する語を過去において借用したとは思われないものさえあります。例えば、「成し遂げる」という意味の bring about は英語本来の表現のようにみえますが、実際には英語本来の語である about にはそれと関連した意味はありません。それはフランス語の表現で、例えば *venir à bout d' une affaire* (ある事を成し遂げる) という普通の表現がその源にあるのです。

[29] 私たちの言語の昔からの系譜を明示する際に、英語の語源学者たちはその溢れる学識を余りにも無駄にしてきたように思われます。彼らはほとんどすべての語について源から諸言語を経由して現在に至る歴史をたどったにもかかわらず、最初の派生で十分に示されることを全体として示すことしかしませんでした。最初の派生を示す慣行は簡略的な辞書においては大いに有効です。そのような辞書では、ひどく損なわれた問題の多い言語はより確かで広範囲に及ぶほかの言語との親近性によって説明されます。しかし、英語本来の語の語源を取り上げる場合には、このような慣行は一般的に不必要です。ある単語がサクソン語の語源から容易に導き出されるとき、私はそれ以上に追求することはほとんどありません。なぜなら、私たちはサクソン語の親を知らないからです。一方、フランス語から借用された場合には、明らかにそのフランス語がどこから生まれ出たかを示そうと思えます。源であるサクソン語の源が見つからない場合には、その欠陥は近親の言語によって補われるかもしれません。一般的に、それらの言語については英語語彙集の執筆者によって必要なものがまったく気前よくらいに準備されているでしょう。彼らは思慮分別および勤勉さにおいてしばしば最高の賛辞に値する著述家ですから、少なくとも私が彼らについて敬意をもって述べることは必要でしょう。彼らのおかげで、私はとても骨の折れる仕事の大部分が免除され、せいぜい邪魔なものを拒否するという簡単な仕事だけが私に残されました。

[30] 私たちはこんなふうにしてすべての単語をその元の語までたどりますし、その元の語がまったくわからない単語については細心の注意を払うのでないかぎりどれも認めません。こうすることにより、低俗な語がはびこったり隠語が溢れることから私たちの言語を守ることができるでしょう。それらの語は愚かな考えや気取った言動から生まれたもので、言葉の正しい原理から生まれることは決してありません。それゆえ、それらの語は規則にかなった派生の歴史を示すことがまったくできません。